

山口県立大学における e-learning 個別利用者のアクセス頻度と 大学内外におけるネット環境の整備

岩野雅子、浅羽祐樹、宇田川暢

How to Facilitate YPU Students' 'Crossing the Chasm' in their Individual Accessibility to e-learning
IWANO Masako*, ASABA Yuki*, UDAGAWA Mitsuru**

In April 2011, the Faculty of Intercultural Studies introduced Learning Management System (LMS) in conjunction with the e-quality University project of Yamaguchi Prefectural University. Currently, e-learning programs for teaching five subjects are running in the framework of the Faculty's LMS, which is named 'Web-culture'. This system creates a collaborative learning environment between students and faculty, and also amongst students. Access to e-learning is high, for example, in the subject 'International Relations', some students visited the site more than 1000 times or even 2000 times over 14 lessons. The average number of access times is approximately 500. This cannot be managed without a system administrator, especially when using an open source system such as Moodle.

While students' motivation to utilize the LMS may increase in accordance with the ability of faculty who are innovative in their use of Information Communication Tools, it is anticipated that their environment might also significantly influence students' performance. This paper reports on the first step towards understanding students' responses to LMS in this University, with a view towards clarifying factors to improve students individual accessibility to e-learning and preparing for the future generation of the so-called 'IT natives', who will be entering Universities within a decade. The factors brought up here are referred to as a 'chasm', which may be obstacles not only for students but also for faculty and staff.

はじめに

21世紀は情報化社会といわれる。教育分野においては、1940年代後半の通信教育の開始から1980年代のコンピュータを使った教育の導入へ、さらには1990年代のインターネットを使ったe-learningの登場へと進んだ。e-learningについてはCALL (Computer-Assisted Language Learning) に代表される語学教育、テレビ会議や遠隔講義、リメディアル教育等で活用され、2000年代にはインターネット大学や大学院等が開設された。その後、大学における教務管理システムや学習支援システム (LMS: Learning Management System)、学ぶ者同士のネットワーク化 (SMS: Social Media Service) などが次々に開発されてきている。今後は、大学全体の管理運営業務に関するITガバナンスの策定から大学の危機管理に関するセキュリティ対策、図書館業務支援や事務業務支援のIT化、デジタル教材等の教育コンテンツ配信、学術情報データベース、学生募集支援、さらには、電子黒板等に代表される未来の教室 (フューチャースクール) というハード面に至るまで、情報通信技術を活用した教育は一層浸透していくことが予想される。

このような流れの中で、国際文化学部では平成20年度 (2008年) から主として語学能力・行動力・創造力を身につける学びの空間としてのe-learning (仮称、En広場) を提案し、平成22年度 (2010年) に学内助成金を得て情報通信技術を活用した教育の可能性について検討を深めていった。その結果、平成23年度 (2011年度) には3大学連携事業におけるMoodleを使った学習支援システムの枠の中で、LMSとしての「Webかるちゃー」を開設した。

「Webかるちゃー」は、学生から「うえかる」の4文字愛称で呼ばれている。ここでは、e-learningとして1年生必修となる学部基幹科目2科目 (「国際関係論」「異文化交流論」) をはじめ、「フィールドワーク実践論」「地

* Faculty of Intercultural Studies, Yamaguchi Prefectural University

** Office for the Promotion of Research and Education, Yamaguchi Prefectural University, System Engineer

域実習」「卒業演習」「海外語学研修」等の科目運用を始めたところである。また、3大学連携事業のe-quality仮想大学内ではe-learningによる入学前教育を行っている。実現については賛同を得た教員の協力のほか、e-learningの管理者（システムアドミニストレーター、本学ではシステムエンジニアとして採用されている）の存在が大きい。自律型学習の進展には、教員・学生・システムアドミニストレーターという三者間の「collaboration」（協働）が必須である。e-learningの管理者は、大学全体の情報化システムの管理者とは異なった役割を持つ。学びの協同体の運営が円滑に進むよう、教員や学生からの希望に応じたカスタマイズやコントロール、データ化などを担ってくれる教育パートナーである。

e-learningの開始からまだ一年を経過せず、学生の学習成果自体については今後の進展を見定める必要がある。そこで、ここでは2011年前期に行った「国際関係論」をもとに、まずは個別の学生がe-learningにアクセスできる教育環境の整備が必要であることを明らかにしたい。ネット環境を整備し学習成果を上げるためには、キャズム（chasm：深い溝）を越えていく必要がある¹⁾。本学あるいは本学部においてその落とし穴が何であるのかを明らかにし、教員の側からも学生の側からも学習理解度や満足度が得られ、到達度が見えるものとしてe-learningを育てていくために何が必要であるかについて報告する。

2. 情報通信技術を活用した教育

いつでもどこでも学べるユビキタスネットワーク社会を迎えた今日、e-learningはパソコン利用からタブレット端末活用に移行したいわゆる「次世代e-learning」の時代に入っている。学生が自宅から授業を受けたり自主学習を行ったりするだけでなく、教員が自宅から授業を行う事例や、授業内でタブレット端末を使った講義展開やグループワークをする事例、ウェブ上のオープンキャンパスにいつでもどこからでも参加できるようにする事例、教員と学生間だけでなく、学生と学生間の双方向型学習による能動的な学びを実現する事例等が報告され、ユビキタスキャンパスやユビキタスカレッジが実現化しつつある。その背後にある教育哲学は、従来から唱えられていた学びの主体者は児童・生徒・学生であるという考え方である。教育の使命は、彼ら・彼女ら自身が学ぶ楽しさを味わい、眠っていた能力を磨いて、豊かな自分づくりを実現する助けをすることにある。生涯学習の時代にあって人間は一生学び続ける主体である。これに伴い、学校教育における授業は教員側が教育機器を使いこなして優れた授業展開をするという従来の段階から、教育機器を使いこなすのは児童・生徒・学生側であるという視点に移行している。

平成17年（2005年）に中央教育審議会が示した21世紀の知識基盤社会（knowledge-based society）は、「21世紀は、新しい知識・情報・技術が政治・経済・文化をはじめ社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す」とした²⁾。そこでは、知識に国境はなくグローバル化が進み、知識は日進月歩で競争と技術革新が絶え間なく生まれ、知識の進展は旧来のパラダイムの変換を伴うため、幅広い知識と柔軟な思考力に基づく判断が重要になるとされた。特に人材が資源である日本社会においては、先見性・創造性・独創性に富んだ人を育成することが必要であり、活力ある社会が持続的に発展していくためには、「専攻分野についての専門性を有するだけでなく、幅広い教養を身に付け、高い公共性・倫理性を保持しつつ、時代の変化に合わせて積極的に社会を支え、あるいは社会を改善していく資質を有する人材、すなわち『21世紀型市民』を多数育成していかねばならない。」とされている³⁾。このような21世紀型市民の育成に、情報通信技術を活用した大学教育の推進が重なる。

現代の小中高校生はデジタルネイティブ世代と呼ばれている。欧米や近隣の韓国とは大きく遅れてしまっているが、日本においても2020年までに一人に一台のタブレットパソコンを整備する取組が小中学校でも推進されている⁴⁾。これらの世代が次々に大学に入学してくることを踏まえ、大学における情報通信技術を活用した教育（いわゆるICT活用教育）や、教育サービス産業としての大学管理運営体制全体のIT化は欠かせないものとなっている。デジタル・ディバイド、いわゆる情報格差は、それを使える個人間の格差だけでなく、それを整備できる学校・大学間格差として現れてくることも予想されている。

国際文化学部では、平成21年度（2009年）からICT活用教育に関するFDを開催してきた。ICT活用教育の先進事例、利用するシステムの違い、学部基幹科目での活用事例等についてであるが、今後はeポートフォリオや英語以外の外国語（中国語、韓国語）のe-learning等に視野を広げていく予定である。

3. 他大学の事例

放送大学学園の調査によると⁵⁾、大学のe-learningによるLMS (Learning Management System) 導入状況について、2010年度の時点で国立大学の51.7%、公立大学の22.6%が導入していると答えている。公立大学においてはMoodleが54.0%でシェアを占めており、国立大学での42.4%と比較して高い数値となっている。ICT活用教育の阻害理由については、ほとんどの大学が予算不足を挙げている。商用のLMSに比べると、オープンソースのMoodleは導入や維持管理に多くの作業工数が必要であるが、コスト削減をしたいという予算制約のなかで、公立大学のシェアが高くなっていると推測される。国立や私立に対して、特に公立大学の予算制約の厳しさを見て取ることができる。一方で、国立大学の97.5%、公立大学の91.5%がe-learning導入は重要であると考えていることから、今後大学におけるこの領域の発展が進むことが期待される。

本学3大学連携事業及び国際文化学部のICT活用教育に関する準備調査の段階において他大学視察を行った。その内、商用のLMSであるBlackboard (Bb) を利用している大学は富山大学、福井県立大学、玉川大学であった。福井県立大学は県内の大学間連携事業を展開しており⁶⁾、そこでMoodleを利用した実績をふまえて、今回のシステム更新よりBbからMoodleへの移行を決定していた。また、富山大学においてはBlackboardとMoodleが併用されていたが、Moodleに完全移行する予定であるとの話であった。Blackboardの利用をやめる理由としては、両大学とも経営側からの予算圧縮の要望によるものとのことであった。海外で大きく展開しているBlackboardであるが、日本国内におけるBlackboardのシェアは減少傾向が見られ、LMSの活用に変化が出てきていることが推測される。先に述べた本学3大学連携事業e-quality仮想大学、及び国際文化学部のWebかるちゃーは、ともにMoodleで運用させている。

商用のLMSであるBlackboardに比べれば、オープンソースであるMoodleを導入する経費は少なく済む。しかしながら、まずはMoodleを動作させるためのサーバの導入が必須であり、初期設定作業には専門的な知識が必要となる。Moodleは頻繁にバージョンアップが行われるという特徴があり、不具合の修正や機能の追加などがバージョンアップ毎に行われている。そのため、導入すれば終わりではなく、導入年度内は小さなバージョンアップを行い、年度の節目に大きなバージョンアップを行うなどの作業が必要となる。このため、システム管理者（システムアドミニストレーター）が必要になる。Moodleの利点をいくつか挙げると、オープンソースであるため、無償で利用する事が可能であること。利用者が開発しやすい言語で作成されているため、利用者が自分でカスタマイズできること。商用のLMSであれば利用者が自ら変更を行うことは事実上不可能である。また、さまざまな追加モジュールが第三者から提供されており、Moodleに組み込むことで機能を拡張する事が可能なことが挙げられる。反対にMoodleの問題点としては、プログラム自体は無償で利用可能だが、導入や運用は自ら行う必要があり、場合によっては見えないコストがかかってくる。教員側のインターフェイスで分かりづらい点が多く、一時的とはいえ教員への負担が大きいこと。統一されたポリシーが無い状態でモジュール毎のユーザインターフェイスが開発されているのが原因であり、オープンソースの弱点であると言える。しかし、学生側からの利用については操作すべき場所が少ないためか、この影響はさほど顕著には受けない。

その他、導入にあたって国際文化学部が参考とした先進的取組事例については、欧米やアジア等の海外11大学と国内8大学に関する調査報告や⁷⁾、各種研究会やフォーラム等⁸⁾がある。

4. 「国際関係論」での活用例

「国際関係論」は国際文化学部の4つの学部基幹科目⁹⁾の一つであり、国際文化学科と文化創造学科の区分なく、1年生全員が必修科目として受講する。国際文化学部の「専門教育科目群」で必修科目に指定されているのは、学部基幹科目の他、2年次から4年次にかけての演習科目「基礎演習Ⅰ・Ⅱ」、「専門演習Ⅰ・Ⅱ」、「卒業演習Ⅰ・Ⅱ」だけである。それだけ、教学上の位置付けが重視されている。また、開講期は、「日本文化論」と同じく、前期に配置されている。「専門教育科目群」の科目でありながら、「基礎教養科目群」、その中でも、初年次教育としての性格を強く帯びざるをえない。「到達目標」として、「国際関係における諸問題を理解し、幅広い視野から国際問題をとらえる能力を身につけることで、国際教養を涵養し、個々の事物・事象から専門課程への動機付けを行う」ことを掲げている。なお、平成23年度を受講生数は、国際文化学科1年生69名、文化創造学科1年生57名、その他7名¹⁰⁾、計133名であった。

このような科目特性に鑑み、以下3つの方針を予め設定し、試験的にLMSを導入した。第1に、唯一の正解を

指定した高校までの学習から、問いそのものを自ら立て、主体的に取り組むという大学での学習へと学習姿勢を改める契機を提供することである。変化の仕方それ自体が変化中、学習姿勢を常に変化させていくことは、切実な今日的挑戦である。第2に、自らの学習の履歴を他の学習者にもオープンにすることで、相互にピア・レビュー(peer review)を行うことができるようにすることである¹¹⁾。学生一人ひとりの個別のパフォーマンスは、他の学生との相互作用によっても左右されるため、一つひとつの科目、ひいてはカリキュラム全体を「学びの共同体(learning community)」としてデザインすることが重要である。第3に、ピア・レビューを常態化することで、レビューの結果だけでなくレビューすることもレビューされるということを意識化させ、自らの基準そのものを問い質すことを習慣化させることである。「文化の交流・創造・発信」を行うことができる人材の育成を掲げる国際文化学部において、多様な文化や場合によっては相異なる価値観を有する他者、すなわち、基準そのものが異なる非共約性(incommensurability)を前提にした「交渉(negotiation)」は今後教学上の検討課題である。つまり、自らの言動に対して、当たり前だと思っていたことを当たり前にしな(take the taken-for-grantedness seriously)「再帰的な瞬間(reflexive moment)」を提供することを目指した。

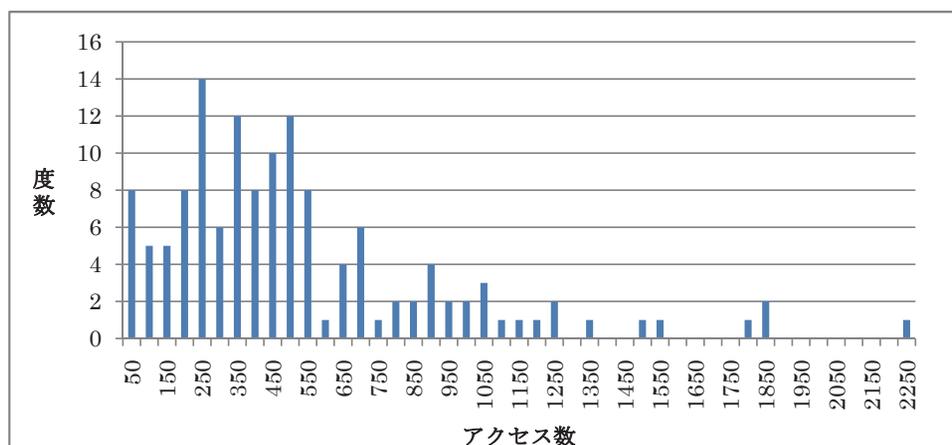
この方針に基づき、具体的には、以下のとおり運用した。第1に、15回、毎回、授業終了後直ちに、配布したハンドアウトの他に、関連する資料を掲載、または関連サイトへのリンクを提供し、個別に復習だけでなく、発展的に学習できるようにした。第2に、受講生がまずはLMSそのものに馴染み、今後も継続的に利用していくことができるように、単純にアクセスするところから始め、徐々に相互にコメントを付すように促すなど、段階別に課題を設定した。前者の例としては、第2週目の「自己紹介」や第3週目の「ゴールデンウィークにこんなことする！／した！」、後者の例としては、第5週目の「戦略的思考に関する『私』の考え」や第9週目の「秋元康は何を仕掛けているのか？」を挙げることができる。第3に、授業内容の他にも、「今週の県立大学」を紹介することで、「県立大学」生であることへの所属意識を涵養し、将来を展望できるようにした。第6週目の「水無月祭の騎馬戦の様子」、第7週目の「先輩たちによる東日本大震災復興支援活動(1)(2)」、第12週目の「大田舞さん(卒業生／ファッションデザイナー)の活躍ぶり(1)(2)」はその例である。具体的な活用例の全容については、後掲する資料2を参照されたい。

今後の課題としては、以下の3点を挙げることができる。第1に、今回、試験的に導入したわけだが、今後、導入する範囲を拡大するにあたって、科目特性に応じて、カリキュラム全体の中でLMSに期待することを学部・学科として位置付け、教員相互間で連携をとる態勢を整備することである。利用の形態は様々ありうるが、科目担当教員のメディア・リテラシーの差によって有意な差が生じないように留意する必要がある。第2に、学生一人ひとりの学習履歴を個別IDで管理・記録・継承・共有し、科目間の相違や経年変化を追跡することができるようにすることである。そうすることで、在学期間の全体を通じて、学生自身も自らの学習ポートフォリオとしPDCAサイクルにおけるC→Aとして活用できるだけでなく、科目担当教員や学部・学科としても、チーム・ティーチングにより体系的に臨むことが可能になる。第3に、学生一人ひとりの個別の学習履歴だけでなく、相互のインタラクションに注目することで、「前に踏み出す力(アクション)」の「働きかけ力」や「チームで働く力(チームワーク)」(社会人基礎力)を測定することも可能になる。具体的には、例えば、発言するタイミングやコメントを付けたたり付けられたりすることをこれらの力の代替変数と看做し、その頻度や方向性、内容についてデータを蓄積することで、個別の学生のパフォーマンスだけでなく「学びの共同体」の質についても分析することもできる¹²⁾。いずれの点についても、「育てる：教育を重視する大学」や「ささえる：学生を大切に作る大学」という本学の建学理念の実現に向けて、学部・学科を挙げた組織的な取組と大学からの継続的な支援が欠かせないことは言うまでもない。次期中期計画を策定し、教学上のさらなる展開を図ろうとする重大な岐路に立つ今、LMSについても、試験的な導入に伴う暫定的な成果とそこから析出された課題についてPDCAサイクルのC→Aを実施しつつ、より大きな絵の中に位置づけていくことが喫緊である。

5. 学生のe-learningへのアクセスとネット環境との関係について

国際文化学部1年生に対し、ネット環境に関するアンケート調査を行った。調査項目については資料1を参照されたい。対象者は学部基幹科目履修者137名。回答者は135名である。2011年前期に開講した「国際関係論」におけるアクセス数は、多い学生では14回の授業を通して2000回近くになっており、平均501回、中央値414回となっている。詳細は図1に示した。

図1 学生の「Webかるちゃー」アクセス度数分布



国際関係論未受講者およびアンケート未回答者を除いた有効回答者119人につき、表1として設問項目ごとのアンケートの集計結果を示す。アンケート調査の質問については資料1の通りである。

全体的に見ると、自宅生が多く、インターネットに繋がった自分用のノートパソコンを持っているが、学校で無線LANに接続してネットを利用する事はほとんど無いという学生像が見える。また、iPadやAndroidなどのタブレット型PCを持つ学生は少ない。また、アクセス数の少ないグループ（300未満、37人）、中くらいのグループ（300以上500未満、39人）、多いグループ（500以上、43人）という3つのカテゴリーに分類し、先に述べたネット環境に関するアンケート調査と関連させ、有意な差が見られる項目について記述したものが表2である。この表をみると、自宅生が少なく、寮生が多いグループほどアクセス数が多い事が見て取れる。仮説ではあるが、寮生は勉強しやすい環境にある可能性が高い。表には記載が無いが、寮生は全員が自分専用のPCを所有している。ほぼ全員がネットにつながったパソコンを所有しているが、キャンパスに持参して活用する学生は少ない。それは、学内において無線LANへ接続するための設定が困難であると感じている学生が多いためだと推測される。アンケートの結果から、無線LANへのアクセスが容易になれば、もっと使いたいと希望していることがわかる。アクセス数が少ない学生も多くが無線LANの利用を希望していることから、授業の空き時間に容易にネットにアクセスする環境を整えば、e-learningはより進み、自主的な学習が促進される可能性があるといえるだろう。

今回の調査は国際文化学部のLMS導入直後ということ、また対象が大学入学直後の1年生ということもあってか、明確な結果が出たとはいえない。ただし、ネット環境によって利用状況に明確な差が出にくいとの結果であると解釈すれば、学生の意欲次第でe-learningは浸透していくのではないかと期待される。

表1 アンケート回答内容の集計結果

	未回答	1	2	3	4
問1	0	26	63	30	-
問2	0	114	2	3	-
問3	0	119	0	-	-
問4	0	30	89	-	-
問5	0	113	6	-	-
問6	6	21	92	-	-
問7	0	10	109	-	-
問8	11	1	45	44	18
問9	1	93	25	-	-
問10	0	6	113	-	-
問11	0	22	97	-	-

表2 アクセス数に対する環境の相違について

	アクセス数少	アクセス数中	アクセス数多
問1 住居について	自宅生 - 16% 下宿生 - 65% 寮生 - 19%	自宅生 - 28% 下宿生 - 51% 寮生 - 20%	自宅生 - 21% 下宿生 - 44% 寮生 - 35%
問2 PCの所有	専用あり - 100% 共用あり - 0% なし - 0%	専用あり - 100% 共用あり - 0% なし - 0%	専用あり - 88% 共用あり - 5% なし - 7%
問8 大学で無線LANを 使わない理由	未回答 - 11% 設定不明 - 0% 設定困難 - 30% 必要ない - 43% PC室利用 - 16%	未回答 - 5% 設定不明 - 0% 設定困難 - 36% 必要ない - 33% PC室利用 - 26%	未回答 - 12% 設定不明 - 2% 設定困難 - 47% 必要ない - 35% PC室利用 - 5%
問9 大学で無線LANを 使いたいのか	未回答 - 0% 利用したい - 84% 必要ない - 16%	未回答 - 0% 利用したい - 64% 必要ない - 36%	未回答 - 2% 利用したい - 86% 必要ない - 12%
問11 性別	男性 - 11% 女性 - 89%	男性 - 30% 女性 - 70%	男性 - 16% 女性 - 84%

おわりに

大学入学前にマイパソコンの購入を進めていた時代から、大学が無料でタブレット端末を配布する時代に移行している。マイパソコンは文章や図表等を作成するツールから、ネット上でも学習を展開し、情報を共有あるいは交換し、自律した学習を進める道具になっている。授業の空き時間にマイパソコンを開く時代から、授業中にタブレット端末を開いて資料閲覧や資料検索をする時代となり、小学校でさえも一人に一台の「未来の教室（フューチャースクール）構想」が急速に進んでいる。このような近未来に対して、高等教育としてどのような学びの形を学生や地域に提供するのか。本学ならびに本学部に入学者の「未来の学生」に対して答を用意する必要がある。

2012年2月の朝日新聞に、佐賀県ではすべての県立高校生にタブレット型端末を配布する方針を固め、2013年度新入生から実施するということが報告された¹³⁾。佐賀県からは本学部にも入学者がいる。8年後以降だと考えていたフューチャースクールの卒業生の大学入学が、予想以上にすぐ目前へと迫ってきた感がある。

(注)

- 1) Moore, Geoffrey A., *Crossing the Chasm: Marketing and Selling Disruptive Products to Mainstream Customers*. Harper Business, 2002/ジェフリー・ムーア (川又政治訳) 『キャズム：ハイテクをブレイクさせる超マーケティング理論』 (翔泳社、2002年)
- 2) 「我が国の高等教育の将来像 (答申)」 (平成17年) 中央教育審議会 文部科学省サイトより。
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/05013101.htm
(2011年12月12日最終アクセス)
- 3) Moore, *op. cit.*, ch.1/ムーア、前掲書第1章。
- 4) 「教育、あしたへ デジタルが来た」 (朝日新聞2011年12月7日10版) 参照。
- 5) 「ICT活用教育の推進に関する調査研究」委託業務成果報告書 (2011年) 放送大学学園。
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/icsFiles/afieldfile/2011/06/16/1307266_5.pdf

(2011年12月12日最終アクセス)

- 6) F-Leccs (Fukui Learning Community Consortium) 事業。文部科学省戦略的の大学連携支援事業【総合的連携型(広域型)】(2008年~2010年)。福井県内の7つの大学と高専を結び、人のネットワークとICTシステムを使った教育環境を整備している。SNSを利用したコミュニティ形成、LMSを利用した授業支援、eポートフォリオを利用した学習者支援、TV会議やWeb会議等のネット会議利用を促進している。
<http://f-leccs.jp/> (2011年12月12日最終アクセス)
- 7) 「ICT活用教育の推進に関する調査研究」委託業務成果報告書(2011年)放送大学学園。国内外の事例については以下を参照。
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2011/06/16/1307266_2.pdf
(2011年12月12日最終アクセス)
- 8) 上記6)で示したF-Leccsが開催したMaharaオープンフォーラムや熊本大学eラーニング機構(<http://www.ield.kumamoto-u.ac.jp/>)が開催したフォーラム等がある。
- 9) 他に、異文化交流論、日本文化論、生活文化論がある。
- 10) 3年次編入生である。
- 11) 国際文化学部では、卒業研究の中間発表会、最終発表会で、ピア・レビューを実施し、教育の質保証に組織的に取り組んでいる。
- 12) 「大人の学びを科学する」中原淳准教授(東京大学)は、「Twitter能力論」として、「トイカケラビリティ(問いかける能力:問いかける+ability)」、「ツッコマラビリティ(つっこまれる能力:つっこまれる+ability)」、「ツナゲラビリティ(つなげる能力:つなげる+ability)」、「マメラブル(マメにレスをかせすこと:まめさ+able)」の4点を試論的に挙げているが、これらの能力はtwitterに限らず、広く他者と一緒に学習する上で一般的に必要なケイパビリティ(capability)として考えることができる。詳しくは、ブログのエントリー(<http://www.nakahara-lab.net/blog/2010/01/twitter.html>)を参照のこと。また、前田信彦『仕事と生活:労働社会の変容』(ミネルヴァ書房、2010年)の第7章「学校から職業生活への移行とワーク・ライフ・スキル」では、サークルや大学などにただ単に所属しているのではなく、その中で濃厚な接触をできるかどうか「潜在的無業層」かどうかを左右するという知見が明らかにされている。
- 13) 「全生徒にタブレット端末 佐賀県立高校、13年度から」(朝日新聞2012年2月1日)
<http://www.asahi.com/national/update/0201/SEB201202010002.html>より(2012年2月8日最終アクセス)

(資料1) ネット環境に関するアンケート調査

「Webかるちゃー」利用に関するアンケート調査(お願い)

国際文化学部ではICTを活用した授業を促進するため、e-learning「Webかるちゃー」を運用した授業科目を導入しています。今後、より活用しやすい環境を整える参考としたいので、調査にご協力お願いいたします。

国際文化学部 岩野雅子

各質問について、あてはまるところ1カ所に○をつけてください。

問1 あなたは次のどれに当てはまりますか?

1. 自宅生
2. 下宿生
3. 寮生

問2 自宅/下宿/寮で、ネットにつながったパソコンをもちますか?

1. ネットにつながった自分用のPCをもちている
2. ネットにつながった共用のパソコンをもちている
3. ネットにつながったパソコンはもっていない

山口県立大学におけるe-learning個別利用者のアクセス頻度と大学内外におけるネット環境の整備

すべてのコース...

- 📄 (歩き始めた「あなた」へ)この道わが旅(youtube)

📄 第3回目ハンドアウト(2011年4月28日) Word文書

📄 (VIDEO)President Obama on Death of Osama bin Laden (White House)

📄 Remarks by the President on Osama Bin Laden (White House)

📄 オサマ・ビンラディンについてオバマ大統領演説(日本語訳)
- 4 基礎セミナーのグループでもサークルでも国家でも、集合的な決定を行う場合には、厚生さを衡量する「クセ」をつけてください。 ┌

📄 事例(5)に関する「私」の考え

📄 第4回目ハンドアウト(2011年5月12日) Word文書

📄 事例(1)~事例(5)
- 5 人生の重要な局面で「ジャンケン」をするとき、戦略的思考に基づいた行動を心がけてみてください。 □

📄 戦略的思考に関する「私」の考え

📄 「じゃんけんから考える北朝鮮問題(読み上げ原稿)(英語)(word)

📄 「じゃんけんから考える北朝鮮問題(配布資料)(英語)(word)

📄 「じゃんけんから考える北朝鮮問題(日本語)(PDF)pp.40-43参照

📄 ブルッキングス研究所における講演全体の概要(web)

📄 ブルッキングス研究所による講演の案内(web)

📄 トウギャラれた「じゃんけん」(web)

📄 新幹線での椅子取りゲーム(web)

📄 第5回目ハンドアウト(2011年5月26日) (word)

📄 【おススメ】ある大学4年生のブログ(web)
- 6 今、手元にある度量衡 (scale) では掴みきれないくらい世界は深淵だと気付くところから、スケールアップがはじめるのだと思います。 ┌

【キャリアサポ】 コーナーでは、卒業後のキャリアを考える上で参考になる1年生向けの学内のイベントを案内しています。

📄 おススメのウェブサイトについてのShow & Tell

📄 第6回目ハンドアウト(2011年6月2日) (word)

📄 水無月祭の騎馬戦の様子(web)

📄 乙武洋匡さんのバフフルさ(web)

📄 【キャリアサポ】「キャリア講座～あなたの将来設計(6/17(金)3時限@C11)」(PDF)

📄 【キャリアサポ】「職業興味検査(6/17(金)4時限@A31)」(PDF)

📄 【キャリアサポ】「ビジネスマナー講座(6/15(水)3時限@C11)」(PDF)

📄 【キャリアサポ】「6月就職・進路相談の日程」(PDF)
- 7 変えることのできるものについて、それを変えるだけの勇気をわれらに与えたまえ。
変えることのできないものについては、それを受けいれるだけの冷静さを与えたまえ。
そして、変えることのできるものと、変えることのできないものとを、識別する知恵を与えたまえ。 □

📄 冷静さ/勇気←智慧

📄 第7回目ハンドアウト(2011年6月9日) (word)

📄 先輩たちによる東日本大震災復興支援活動(1)(web)

📄 先輩たちによる東日本大震災復興支援活動(2)(web)

📄 「私が見たガーナ」6/23(木)12:00~12:30@厚生棟和室(web)
- 8 This is it!に出会って、「始める(begin)」と、「今、ここ」で、世界が変わるかもしれない。 □

「文化の交流・創造・発信」はこの「始まり(beginning)」次第。

初めは誰だってBeginner。「そらをじゆうにとびたいな」という内なる声(inner voice)に突き動かされて。

📄 始める/始まり/Beginner

📄 スーザン・ポイルが「スーザン・ポイル」になった瞬間 (youtube)

📄 オオカミとフタ (youtube)

📄 砂絵アート (youtube)

📄 YPU TFT PROJECTのブログ(web)

📄 YPU TFT PROJECT: 中国新聞「ひろしま国」(日本語版)での紹介(web)

📄 YPU TFT PROJECT: 中国新聞「ひろしま国」(英語版)での紹介(web)

📄 Table For Two(TFT)のホームページ (web)

📄 Table For Two University Association(TFT-UA)のホームページ (web)

📄 TFTのツイッター (web)

📄 TFT-UAのツイッター (web)

📄 Beginner / AKB48 (youtube)

📄 「そらをじゆうにとびたいな」/ドラえもののうた (youtube)

📄 YPUドリームアドベンチャープロジェクトに文創1年生の2つのグループが採択(web)
- 9 プラットフォームとは、どんな道具でも持ち込めて、誰とでも、これまでなかった遊び方ができる広場のこと。秋元康が仕掛けているのは、大島優子や「金いたった」やAKBという「道具」そのものではなく、アイドル・プロデュースの「広場」である。プラットフォームを生み出すか、まずは上手く踊れ！ □

📄 秋元康は何を仕掛けているのか？

📄 第9回目ハンドアウト(2011年6月23日) (word)

📄 「アキバアイドルを輸出せよ」(NHK番組「追跡」 A to Z)2009年12月5日) (web)

📄 AKB48/金いたった (youtube)

📄 おニャン子クラブ/セーラー服を脱がさないで (youtube)

📄 AKB48/セーラー服を脱がさないで (youtube)

📄 AKB48 Official Channel (youtube)

📄 AKB48公式サイト (web)

📄 AKB48推し面メーカー (web)

📄 トウギャラれた「政治学者たちが語るAKB48総選挙論－有権者の意識や制度を中心にー」(web)
- 10 「支配なんかしねえよ この海で一番自由な奴が 海賊王だ!!!」(モンキー・D・ルフィ、『ONE PIECE』) / 「『こっちの岸から向こうの岸まで渡して やらう』この「約束」を抱えて「船」は生まれる…」(フランキー、『ONE PIECE』) 「海を見る自由」を堪能してください。 ┌

📄 「海を見る自由」とは何なのか

📄 『メイリン』ことでの『好都合』とは何か(web)

📄 【キャリアサポ】1年生対象 第1回学内プレ合同就職ガイダンス:7/2(土)10時@講堂 (pdf)
- 11 Make the familiar unfamiliar, and make the unfamiliar familiar. ┌

📄 『走っけろメロス』(pdf)

📄 太宰治(著) / 鎌田紳爾(津軽語訳・朗読)『走っけろメロス』出版社サイト(web)

📄 「太宰作品“津軽語”で CDブック『走っけろメロス』出版」『陸奥新報』(web)

📄 『走っけろメロス』と吉里吉里語(web)

- 12 「海は広いな、大きいな。」 □
④ 第12回目ハンドアウト(2011年7月14日) (word)
④ 学長ランチトーク(7月14日(木)お昼、桜翔館)「海を見る自由、海に出る自由、海賊王になる自由」(web)
④ 学長ランチトーク「海を見る自由、海に出る自由、海賊王になる自由」ハンドアウト(web)
④ 聯合ニュースインタビュー「独島は韓国領、竹島は日本領」(web)
④ 国際文化学部紹介ビデオ(youtube)
④ 大田舞さん(卒業生/ファッションデザイナー)の活躍ぶり(1)(web)
④ 大田舞さん(卒業生/ファッションデザイナー)の活躍ぶり(2)(web)
- 13 一つひとつ、地道に、誠実に、自らの言動で裏打ちしていくことで、ブランドを確立していったほしいと願っています。その意味で、パーソナル・ブランドではなく、常に進行形のパーソナル・ブランディングです。 □
④ 「浅羽祐樹」のブランディング戦略会議なう！
④ 第13回目ハンドアウト(2011年7月21日) (word)
④ 一目瞭然ヤフートピックス(13字)(web)
④ Yuna KIM: キムヨナか、キムユナか(web)
④ Yuna KIMの英語プレゼン(web)
④ 名前についての断章(1): 「天沢聖司」(映画『耳をすませば』)(web)
④ 名前についての断章(2): 「ムーン/おたま/ムータ」(映画『耳をすませば』)(web)
④ 名前についての断章(3): 「名前の豊かさ」(web)
④ 名前についての断章(4): 「『浅羽祐樹』の様々な名前」(web)
④ 名前についての断章(5): 「浅羽『祐樹』の由来/意味」(web)
④ シロバナタンポポのように(web)
- 14 良い旅を。Von voyage ! □
④ 「さなぎ」になるということ
④ 「芋虫はさなぎになるとき、いずれ蝶になることを知らない」(web)
④ 「大学に行くとは、『海を見る自由』を得るためなのではないか。」(web)
④ First Follower! になること(web)
④ 第14回目ハンドアウト(2011年7月28日) (word)
④ 国際文化学科4年生が企画した「東日本復興チャリティイベントIN県大〜できることから始めよう〜」(web)
④ 県立大生のボランティア団体『ぶちボラYP勇氣』手作りうちわやシュシュを被災地へ『サンデー山口』(web)
④ 国際関係論a授業中レポート未回答者へ(word)
- 15 Enjoy YOUR HOT summer. Once get connected, keep in touch. □
④ 「そらをじゆうにとびたいな」
④ (ビデオ講義)「ファースト・ペンギンになってジャンプしよう」(2010年8月9日)(web)
④ (ビデオ講義)「世界とダンスする」(2010年7月29日)(web)

このページのMoodle Docs

あなたは 00000000 浅羽祐樹 としてログインしています。(ログアウト)

[Home](#)

powered by Komazawa University